

# 蘇った軍医の遺品

## 奈良町モノ語り

### 調査から①

# なら 民俗通信

266

勝野

## ▼奈良町モノ語り調査

公益社団法人奈良まちづくりセンターは、平成28年度に文化庁の助成を受けて、「奈良町モノ語り調査を実施し、私も参加した。

この調査は、町家の蔵などに、どのような道具が残されているかを調べて、これらのモノに関連した「物語」を掘り起こそうとしたものだった。調査は西新屋町と北京終(きたきようぼ)て、町の三家で実施できたが、ここでは、西新屋町の松山家で発見された一人の医師の資料を紹介したい。

## ▼医師小川八束

松山家は、江戸時代末期から第二次大戦まで米問屋を営んでいた。奥の蔵に江戸時代末期から使われていたさまざまなモノが残されていたが、その中に何かがぎざぎざと話まっした木箱と柳行李(やなぎお)り)があった。松山家の先代当主の次女・和子の夫小川八束(1913~45)の医学書や遺品だった。

# 文化

し、副手を経て大阪市立桃山病院の医師となり、昭和17年3月に、松山家の次女・和子と結婚した。

病院ではシフテリア、チフスの研究やシフテリア患者の手術で活躍し、学位論文を脱稿しようとする頃、

また医院開業のために住宅を改造して、一家の基礎を固めていた時、昭和18(1943)年5月に召集され、森六〇三(1)付き軍医として、ビルマ奥地で患者輸送

隊で2年あまり活動していたが、昭和20(1945)年7月20日、ビルマ・ピュー

娘にあたる。母は3歳の時、体調を崩し、大阪市立桃山病院に勤務していた八束に診察に来てもらい、一命を取り留めた。「命の恩人」と80歳近くになった母は記憶している。

夫が召集された後、夫の勧めもあり、和子は大阪から家財道具とともに、奈良の実家に疎開した。戦死の悲報が終戦から2年を経て届き、関係者で慰霊祭が行われた。

妻はその後も小川姓を名乗り、松山家に身を寄せて洋服の仕立てをして暮ら

をたてていた。のちに年下の男性と知りあったが、夫の影響が大きく、決断に至るまで時間がかかったものの、再婚して一女に恵まれる。

# 妻が疎開荷物にまとめ

## 妻が疎開荷物にまとめ

### ▼遺族のその後

筆者(勝野)の家と松山家の間は、妻和子の従妹の

方面で行軍中に戦死した。

昭和22(1947)年12月21日に行われた神式の慰霊祭で、小川家の叔父・幸之助が詠んだ「誄辞」(るいじ、弔辞)も残されており、「嗚呼(ああ)、君も亦(また)敗戦の日本の犠牲となりしか」と、将来を嘱望されながら、若くして異国の地で終戦の26日前に戦死した甥(おい)を悼(いた)む言葉は、読む者の心を打つ。

松山家は当主の長男も志願して出征し、ついに帰って来なかった。出征時、家の前で数十人が見守るなか、直立不動で挨拶(あいさつ)した様子が、当時5歳だった私の母親の目に焼き付いているという。

奈良市は大きな空襲には遭わず、文化財や町は守られたと言われる。爆撃被害は、ほとんどなかったものの、戦争によって多くの家系が断絶され、今に至るまで影響を及ぼしていることは、忘れてはならないと思う。

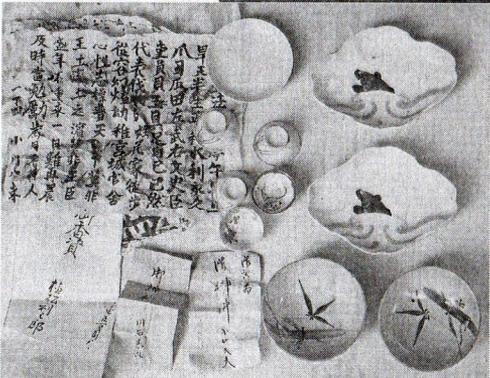
今回の調査は、拙稿「松山家の蔵からよみがえった戦没軍医の生涯」(『地域創造』55号 奈良まちづくりセンター 2017)に報告しているので、詳しくは、そちらを参照していただきたい。(文中敬称略)

(かつの・はじむ) 奈良まちづくりセンター理事



小川八束(昭和13(1938)年卒業記念アルバムより。医学振興協会(大阪)大学医学部学友会)提供

残されていた食器類(香典の袋や小川の手習いの反故紙なども木箱に詰められていた)



今年6月に98歳の人生を全うした。松山の分家へ戦後嫁入りした女性に和子の事を聞く。と、元夫の戦死は知っていたが、医師とは聞かされていなかったという。夫八束への強い想いは、秘めていたかったかもしれない。

▼その遺品

疎開時に和子が持ち帰った家財道具の中には、医師の夫の経歴や仕事にかかわるものが、一括して残されていた。大阪帝国大学の卒業証書や医師免許証、各種辞令類、医学書やノート類、論文抜刷、勲章・メダルなどのほか、拡大鏡、薬さし、試験管、注射器など。さらに妻や親族へ宛てた軍事郵便類、慰霊祭の関係資料、その他、生活用品などもある。

軍事郵便では、大阪市の爆撃で家族を気遣ったものや、ビルマの風景を描き添えたものなどもあり、昭和20(1945)年2月27日付の葉書が最後となっている。

夫が子供のころ習字の手習いをした反故紙(紙や、慰霊祭の時に周囲から寄せられた「御供」の紙で、皿や猪口(ちょこ)を丁寧に包んで木箱にぎざぎざと詰め込まれ